
研究所だより

第331号

2013年6月7日

発行：土佐清水市教育研究所

TEL 82-3016

<学級作り>

授業中は私語が多く、ざわついていて、子ども達が授業に集中していない。休み時間は、ひそひそ話をしている女子グループ、無責任な行動する男子グループなどが見られる。掃除や係活動では仕事の押しつけがあり、立場の弱い者が損をするような場面が見られる。全体として責任ある行動ができず、色々な活動が低調。お互いに牽制し合ったり防御的になったりして、学級全体の足並みが揃わない。これらは、子ども達の学級への帰属意識が低い、学級のルールが定着していない、授業や活動などの行動スタイルが子ども達の共有化・習慣化されていないなどの原因から起こってきます。

その対応として、「ルールを守る子」が学級の多数派になるように、ルールを守って真面目に頑張っている子を適切に評価していく。役割活動で、次のような手順で紹介してみてはいかがでしょうか。

- ①. 今の学級について思うこと、どのような学級にしたいかを書かせ、集約、確認する。
- ②. 目標を守るためにみんなで守るルールについて書く。
- ③. 活動の前に、目的とルールを確認してから取り組ませる。
- ④. 定期的に（毎日→週1回→月1回）に振り返り、確認。よい点は大いに誉め、改善は次の目当てとする。

こうした小さな一つ一つの取り組みはすぐに変容があるわけではありませんが、「今日のこの活動」が目には見えないほどの変化で手段を育成していることを知っている教師は、子どもへの指導のチャンスを外さないし、積み重ねをおろそかにはしないのです。特効薬はありません。教師の地道な取り組みの中で集団は形成されていきます。

新しい環境の中で子ども達は、不安と緊張に包まれています。同時に、集団の中での自分の位置を見つけようと牽制し合ったり、どのような教師か試すような行動を取ったりします。人間関係の不安が学級内での孤立や閉鎖的集団の芽に繋がらないように、学級のルール作りと、少人数での活動を通して、学級生活の不安を取り除いていきます。

- ①. 学級のルールを作る
 - ・係や当番などの役割活動をパターン化する。役割活動の手順を共通理解させる。
 - ・学級の決めごとは、学級全員で確認していく。
 - ・一部の人間関係のトラブルも学級全体に返し、ルール違反の影響を理解させて、定着させていく。個別対応、密室対応で終わらせていると、友だちづきあいのルールを学級全体で理解できず、何度も繰り返されます。

- ・子ども達の試し行動に毅然と対応する。ルール定着のために小さな逸脱行動も見逃さない。ただし、特別な支援を必要とする子どもがいる場合は、特別な対応をする理由をできる範囲で説明し、理解を求める。
- ・定着するまでチェックする。ルールが決まっても守られない状況が放置されると「ルールは守らなくてもよいもの」という認知を作ってしまう。活動前のルール提示、活動後には守れたかどうかチェックし、ルールを守る意味を感じ取らせる。

②. 人間関係の緊張を解く

- ・教師に親しみを感じさせる。昼休み等と一緒に遊ぶなど子どもの活動に教師もできるだけ参加する。
- ・教師の失敗やミスは、きちんと子ども達に謝罪する。「ごめんなさい」「ありがとう」は、信頼関係を築くための第一歩。
- ・教師が叱る時を伝えておく。「この先生は、こういうことを大切に考えているんだ」という理解が、安心感に繋がる。
- ・学校行事を好機と捉え、クラス一丸となって協同活動を成し遂げる体験を積み重ね、自信を持たせる。子ども達が人と協力する楽しさを知り、学級がより大きな集団に形成されていくように支援する。
- ・体験を振り返る場を設け、「友だちあるいは自分のこういう頑張りがあったから、学級全体の成功に繋がったんだ」というように、子ども達が意味ある「経験」として消化できるようにする。

学級作りをしていく中で、子ども間同士のコミュニケーションを意図的に図る手立てをしていくことは教師として当然ですが、気になる子どもへのコミュニケーションはまず教師が行っていくことです。教師は、自分が言いたいことを伝えることに汲々とし、つい指示や一方通行の話ばかりになり、最後はお説教で終わってしまいがちです。そこで、教師は「聴く」ことを大事にしたいものです。

- ①. 「あなたのことを大切に思っているよ。あなたのことをもっと知りたい、だから聴かせて」というオーラをいつも放っておきます。
- ②. 話してくれる相手の波長に合わせて、相づちを打ちます。楽しい話は軽妙な相づち、辛い話には辛そうな相づち。
- ③. 話してくれた後は、「話してくれてありがとう」の気持ちと共感し受容する気持ちを伝えます。

教師の多忙化を言い訳にして、「聴く」ことを手抜きすることはできません。たとえ忙しくても、一瞬でも聴くためのオーラは発散できます。廊下のすれ違いざま、「元気かな」「部活頑張りようね」などなど、誘い水を掛けていきます。ここから対話は始まります。子ども達の姿も目に入らず、忙しそうに廊下を走り抜けたり、顔を合わすと小言ばかりではコミュニケーションは生まれません。

教師と子どもが一体となってより良い学級作り、集団作りに励んでいきたいものです。さらに、教職員集団が一丸となって組織力を発揮し、学校を思い、児童生徒を思い、焦らず、慌てず、時間をかけて指導に励んで欲しいものです。